



Title	アジアにおける国際金本位制の成立と貨幣流通
Author(s)	西村, 雄志
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/45793">https://hdl.handle.net/11094/45793</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	西村雄志
博士の専攻分野の名称	博士(経済学)
学位記番号	第19166号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 経済学研究科経済理論専攻
学位論文名	アジアにおける国際金本位制の成立と貨幣流通
論文審査委員	(主査) 教授 杉原 薫 (副査) 教授 佐村 明知 助教授 鳩澤 歩

#### 論文内容の要旨

19世紀末から20世紀初頭にかけての20年強のあいだに、アジアの通貨制度は、銀本位制から金を本位貨幣とする通貨制度へと大きく変化した。本論文は、その過程を、現地で最も広範に使用されていた通貨である銀貨の役割の変化を中心に検討し、従来国際金本位制のアジアへの普及という観点から捉えられてきたアジア通貨制度史に新たな視点を提供しようとしている。すなわち本論文は、アジアの通貨制度の変化を、ヨーロッパが一方向的に押し付けたものとして捉えるのではなく、むしろ地域の経済状況に対応した通貨制度が導入されたこと、アジア経済の発展に貢献した側面があることに注目している。

序論的考察をなす第1章は、ヨーロッパを中心とする国際金本位制の成立についての概観を与える。国際金本位制に関する従来の研究はヨーロッパとアメリカ合衆国を対象としたものが大半を占める。それに対し、いわゆる「周辺」に位置するアジアの国際金本位制に関する研究はきわめて少ない。しかし、本論文の対象とする時期に、アジア貿易の成長率は世界貿易のなかでもとくに高い成長率を達成していた。そして、アジア諸国の多くは、金をあまり使用せず、しばしば銀貨とポンド為替を利用した、金為替本位制を採用した。本章では、こうした欧米とアジアの違いを概観する。

主章たる第2-4章では、インド、海峡植民地、香港をとりあげ、それぞれの通貨制度の変化が跡付けられる。第2章のインドの事例では、金為替本位制の成立にルピー銀貨が貢献したことが明らかにされる。都市部や一部の地域ではルピー紙幣や金貨の使用が進んだものの、それ以外の大部分の地域ではルピー銀貨が強く選好されていた。そのため、インド政庁は1ルピーを1シリング4ペンスに固定することでルピー銀貨を「ポンド価値を体現する」銀貨と位置づけ、それによってインド国内の通貨制度をポンド体制の下に再編しようと試みた。その結果、インドではルピー銀貨を介したかたちでポンド体制が全域に普及し、最終的には金為替本位制の成立へと導くこととなった。

第3章の海峡植民地の事例では、インドとは異なり、政府紙幣が短期間に銀貨(海峡ドル)を駆逐していった。インドの場合、貴金属貨幣に対する強い選好を排除できなかったのに対して、海峡植民地の場合は海峡植民地政庁の政府紙幣の使用を促す政策誘導が奏功し、1899年に政府紙幣の発行が開始されてから10年程で海峡植民地の中心的な通貨となった。海峡植民地の場合もインドと同じように1海峡ドルを2シリング4ペンスでポンドに固定していたので、政府紙幣の流通が促進されたことは、ポンド体制の下に海峡植民地の通貨制度を再編することを意味した。海峡植民地における金為替本位制の成立も、通貨の種類は異なるものの、「ポンド価値を体現する」通貨が大きな役割を

果たしたと言えよう。

第4章の香港の事例では、2章・3章と異なり、銀本位制が1935年まで続いた。しかし香港もアジアにおける国際金本位制の枠組みに組み込まれていた。香港は華南経済の一部であることを自らの貿易港としての特徴としていたので、銀本位制を維持していた中国と異なる通貨制度を選択することができなかった。しかし、周辺諸地域が金を本位貨幣とする通貨制度へと移行していくなかで、中国だけでなく、金本位制の普及した地域との経済関係も安定させる必要が生じた。そこで重要な役割を担ったのが英系国際銀行である。彼らの持つ信用をポンド価値と同一視することで、彼らの発行する銀行券を「ポンド価値を体現する」紙幣とし、銀本位国以外との商取引での通貨面でのリスクを取り除こうと試みた。変則的な面はあるものの、香港の通貨制度もポンド体制の下に再編されていったと言える。

第5章では、アジアの国際金本位制には事実上あまり金が存在せず、ポンドを基軸通貨とすることでアジア域内市場を一つのまとまりのある通貨圏としたという議論が展開される。金為替本位制と銀本位制の国が混在していた上、自らの裁量で運営できる金を保有していなかったアジアは、相互の通貨制度の交換性を安定化させるために、基軸通貨としてのポンドの存在が必要であった。したがって、アジアの国際金本位制の成立は、事実上第二次世界大戦後のブレトン・ウッズ体制下の国際通貨体制に通じるかたちで、成立したものと理解できるとされる。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、19世紀末から20世紀初頭にかけてのアジアにおける国際金本位制の普及の過程を、インド、海峡植民地、香港の事例を中心に実証的に分析したものである。従来分析が弱かった銀流通を詳細に追うとともに、ポンドを価値尺度とする金為替本位制の成立を新しい角度から論じており、博士（経済学）の学位を授与するにふさわしい業績であると判断する。